

第 1 章 年代記的歴史地理の序説

古代ローマ人やギリシャ人は「アラビヤ・フェリックス」即ち、「幸福のアラビヤ」という形容を、自然の境界によるイエメンにあてはめた。その境界というのは、北はイエメン・アラブ共和国、南はイエメン民主人民共和国を含んでいるのだが、その二つは本来一つであり、分かつことの出来ないものである。（1991年 5月22日南北イエメン統一）

本来のイエメンには、更にアッブウ・アルハーリー砂漠やオマーンが含まれている、と言うような歴史家や博物学者たちの諸説もあるが、西から西南にかけてのイエメンの海岸に面した紅海に浮かぶ沢山の島々から、アラビヤ湾の南にあるオマーン領マシーラ島までも含んでいる、とする説もある。

イエメンの島々の中で最も重要な島々（注1）の一つにサリーフの西方に平行してカマラーン島がある。サリーフから約3Kmの距離があり、紅海のイエメンの島々の大きいものの中の一つである。

（注1） 「イエメン諸島史」ハムザ・アリー・ルクマーン著、P7より要約

島の北西と南に二つの村がある。ムカッラムとヤマンの村にはカマラーンの漁師達が住んでいる。カマラーン島の東へおよそ3Km離れた島の低地部に、人々に信じられている限りにはペルシャの村の遺構がある。

ズカル島は、ザビード地方の西海岸に面しており、島の北側の高度は海拔約624フィートに達し、島の南側の高度は約867フィートである。

半島の最南西にペリム島若しくはマイユーム島がある。この島はバーブ・アルマンダブ海峡に面しており、前述の島は、海峡をつぎの部分に2分割している。小さい海峡は、バープルマンダブに続く島の東側にあり、海峡の幅は約3kmある。また大きい海峡は、島の西側にあり、その幅は21Kmある。船舶は、大きい海峡に存在しているような小さな島々がない、小さい海峡を航行する。小さい島々は「7人姉妹」或いは「7諸島」として知られている。船舶のこのような制約は、小さい海峡を通過する際に、紅海とアラビア海それからインド洋との間における唯一の航路として、バーブ・アルマンダブに対して大きな重要性を与えることとなった。

シーラ島はアデン市の対岸にあり、車両一台分が通行できる程度の道幅の陸道により、アデン市と連絡している。島の中央には橋が架けられており、下を漁船が通行出来るようになっている。島の歴史はアデンの歴史と密接なつながりがある。島はアデン市に属するシーラ港を防備する前哨基地となっているからである。時代を経るにつれて、砦や要塞が島の山頂や麓に築かれていき、港を出入りする船舶等の海上監視を、広域にわたって行っていた。またシーラ島が、アデンの税関を務める一時期もあった。島内には、アデンの統治者達専用の監獄があった。島はまた（歴史を通じて）ポルトガル、エジプト、オスマーン朝、そして大英帝国といった具合に、次々と列強の支配を受けてきたが、その

都度重要な役を演じてきた。幾度となく辛酸を舐めてきたとはいえ、歴史の檣舞台に立つことも数多く経験してきたのである。

こうした列強中大英帝国はアデンを制圧した上1839年にはこれを植民地（訳注1）とし、後述するように、「保護」（訳注2）という名目で南部一帯を手中に収めた。

（訳者注1） 1937年にはイギリスの直轄植民地となる。

（訳者注2） 20 を越える大小の首長国のうち、1882年から1914年にかけてイギリスと保護条約を結び、アデン総督下に置かれ、所謂アデン保護領 Aden Protectorate となった。

次にソコトラ島についてであるが、この島は、イエメン民主人民共和国（この書籍は1986年に出版されている）の行政区の一つであるマハラ地区にある。尚、マハラ地区自体は、以下の様に二分される。マハラ地区にある総督府所在地のソコトラ島を含み、首都ハディーブーを擁する地域と、もう一方はハドラマウト地方のほか、隣接の、かつて総督代理が執務した沿岸首都キシンを擁したアラビア海沿岸地域である。アデン湾・アラビア海沖のイエメン領土中最大の島はソコトラ島で、アデン西岸地域から約300マイルの沖合いにある。面積は、約1400平方マイル。島内には都市に匹敵する規模の町が、首都のハディーブーを除いて三箇所あり、各々はタマーリード（地図上は「モーリー」という地名か？）、カスブ（地図上はカドゥブとなっている）、カンシーアと呼ばれている。最初の町は北部沿岸地域にあり、4マイル四方の平地帯となっている。町は見事な景観で、ナツメヤシに囲まれた家並に魅了される。この同じ場所に、今ではその面影をとどめるだけとなった古代都市が存在しており、「スーク」と呼ばれていた。「マハラ」の由来は次の人名に因む。即ち、マハラ・ブン・ハイダーン・ブン・アマル・ブン・アルハーフ・ブン・カダーアであり、彼はワラド・アルハミーシュ・ブン・ハミール・ブン・サバアの子供の一人である。

ソコトラ島の人口は約3万人、一方残りのマハラ内陸の人口は7万人である。

クリヤムリヤ島は（東経56° 北緯17,5°）マハラの南西に沿った5島で、それら全てはそれぞれの円錐形の頂上が、まるで一つのものであるかの様にせり上がっている岩から成っている。クリヤムリヤを構成している5島は、それぞれ別個の名前を持っている。それらは、スーダ、ジャバリーヤ、ハーシキヤ、ガルズート、ハラニーヤである。これらの中、最も大きく人が住んでいるものでさえも、人口は凡そ150人に過ぎない。彼らは、羊を育て、鳥の糞を集めそれを湾岸諸国やハドラマウトで売って暮らしている。これらの島はかつてそれ自身の役割として、マハルに従ったシャハル地方の統治者の支配の下にあった。一方今日では、マハラ県を含め島全体が、イエメン人民民主主義共和国の管轄下にある。

これらの島は、オマーン領の東南海岸からおよそ25マイル離れている。そして、その言語はヒムヤル語として知られている古いイエメンの方言の名残りと見做されているマハラの言葉に似ている。同様にそれは、年代を越えて混合した様相をもち、隣の海岸地方の言葉（スワヒリ語）からの僅かな言葉や用語によって影響を受けている。

ダフラク島は紅海にあり、エリトリア（エチオピアの紅海沿岸）の向かい側にあるイエメンにより

近い島である。この島はかつてアッバースの人々に対する亡命地であり、スラハフ家の人達がテハーマからナジャーフ家の人々を強制的に撤退させた折り、彼ら（ナジャーフ家の人々）の避難所となった。（このことについては）「スライフ家とナジャーフ家」の章で後に述べる通りである。そして、西部地域のジーザーンに平行してあるファルサーイー島、及びそれ以外の多くの島々については、ハムザ・ルクマーン教授が「イエメン諸島史」の中で（島の）数を数え詳説している。

前述の島々以外の自然のイエメンの境界と言え、それは北部ではビーシャとトウバーラの元にあるワーディー（涸れ川）・タトゥリトウとアッダワーシルである。東部はアラビア湾、南部はアラビア海、西部は紅海である。

かつてイエメンに相次いで乗り込んできた国々は、その歴史の大部分においてイエメンを、交戦し争い合う多数の首長国や国家へと分割した。

自然上の境界から見て、イエメン全土を包括した最初の支配というのは、ヒムヤル国の支配であった。ヒムヤルはヤリーム県のザッファール・ラアインと言う町を首都として採用していた。その支配は限られた期間だったにも関わらず、その影響はイエメンの外にまで及んだ。ヒムヤル国に先んじていたマアーン国がイッバーンにあった時代やサバア国がその最盛期において、両国も統一的イエメン支配の基盤をも築いていたかも知れない。その後イスラームが入って来て、使徒（彼に祝福と平安あれ）の時代と正統4カリフ時代—その4人とは、アブウ・バクル、ウマル、オスマーン、アリーだが—その時代にイエメンは統一されていた。

その統一は、ウマイヤ朝を経て、アッバース朝の半ば、カリフ・マアムーンの時時代まで続いた。この時代からイエメン各地で動乱が起きるようになった。その中の幾つかはアッバース家からの独立を企てたものだった。この事態はマアムーンをムハンマド・ブン・アブドゥラー・ブン・ジャードの派遣へと追い込んだ。それは後にジャード首長国として知られるが、ティファーマに首長国を作り、上述の総督にその地を鎮圧させ、その地とイエメンの他の地域を、1人もしくは2人の総督によって、統治させるためであった。また同様に、イエメン全土における動乱の阻止とウマイヤ朝権力の実現の阻止も目的としていた。

にもかかわらず動乱は続き、イエメン高原とハドラマウトにおいてヤアファル家が一時期成立した。この首長国は、法的な手続きを満すために形式的に従属していたことを除けば、アッバース朝に対して初めて独立した首長国と見做されている。

そして前述の「ジャード家」と「ヤアフィル家」の二首長国の支配の間に、イマーム・アルハーデー（ヤヒヤ・ブン・アルフセイン）がヒジャースのアルルッス山からサアダへやって来て、ザイド派イマームらによる最初の支配をそこに、そしてイエメンの高地にある幾つかの地域において確立した。同様にこの時代には、シリアやエジプトからイエメンへ、ファーティマ朝の影響が広まっていった。

2人の布教者、アリー・ブン・アルファドゥル・アルハンファリー・アルヤマニーとアルハサン・ブン・ハウシブ・アルクフィーとが、ファーティマ朝の布教と支配の旗印を持ってやって来た。しか

しながらアリー・ブン・アルファドゥルは、イエメンに於ける彼の国の基礎を強化しその基盤を築いた時、ファーティマ朝からの独立と、ファーティマ派の布教からの離脱を宣言した。そしてイエメンに於けるファーティマ朝、アッバース朝から独立したイエメンの統治を宣言した。後述のイエメンに於ける最初のファーティマ派の布教史に於いて我々は知ることが出来るが、彼のライバル達が彼を暗殺することを企てるまで、ほぼ20年間もはためき続ける旗の下で、彼はイエメン全土を概ね統一した。

その彼が表舞台へ現れる前にあった諸国家と諸首長国が、彼が殺された後、再び（元の状態に）戻ってきた。イマーム・アルハーディー自身の影響力は、サアダ地方から突如消滅していた。或いはそこ以外のイエメンの高地へ拡散していった。そしてそれは彼と彼を取り巻く諸要因の影響のためと、彼に対する敵国のためであった。

そして「ジャード家」の後に、その首長国がスンニ派であると形容されているところの「ナジャーフ家」の首長国が起こった。同様にその首長国もアッバース朝に従属していたが、それもまた形式上の従属であった。

同様に、イエメンに於けるファーティマ朝、シーア派の影響力の復活であると考慮されている「スラハフ家」の国がそれ（ジャード家）と同時代に存在し、またそのライバルであった。アルカーミル・アブー・アルハサン・ブン・ムハンマド・アルスライヒー王は、彼の統治下でほぼイエメン全土を統一することが出来た。ティハーマ地方の首長であるアミール・サイード・アルアフワル・ブン・ナジャーハが彼を暗殺するまで彼の統治は続く。

アリー・ブン・ムハンマド・スライヒーの後は、息子のアルムカッラム・アハマドが継いだ。彼はサヌアーを国の首都かつ彼自身の居留の中心地とした。彼の王妃アルワー・ビント・アハマド・ブン・ムハンマド・アッスライヒーを中部、南部、ティハーマ地方における彼の代理とした。彼女はジブラの町を彼女の主たる滞在地、また首都とした。

アルムカッラム王の統治の最後には、つまり彼の麻痺が手に負えなくなった時、アルワー王妃は彼女の元、即ち自身の居留地のジブラへ、彼（及びその権力を）を移す事に影響力を持った。また彼の代理としてサナアのカーディ（法官）であったイムラン・ブン・アルファドル・アルヤーミー・アルハムダーニーを任命した。

それから、ハムダーン一族は、王サブア・ブン・アハマド・アッスライヒーの代理となった。彼はアルムカッラム王の死後、王妃アルワーとその治世を分け合った人物であり、彼は、アーニス地方のアシーフの砦ザッファール・マフラーフ・バニー・スワイドを死ぬまで自身の滞在地かつ国の中心地とした。彼が亡くなると、イエメンは分裂した。ヤーミー・ハムダーン一族は、サヌアーでの支配や活動に関して独立した。また彼等はファーティマ朝からも独立した。これらのスルタンのうち最初の者は、ハーティム・アルマグラシーである。

同様に、（ズライウ族の）ジャシュミー・ハムダーン一族もアデンの支配と活動に関し独立し、王妃アルワーの晩年には彼女からも独立した。しかし、彼等はファーティマ朝への帰属からは独立しなかった。後に詳しく述べるように、彼等は（マアイーン族）の後、スライヒー家の代理となった。

次にアイユーブ朝の人々が、エジプトとシリアにおいてファーティマ朝の国家を根絶した後、イエメンに登場し、マフディー家とズライウ家の両首長国を滅ぼした。このズライウの首長国こそ、当時ファーティマ朝に帰属し続けていた唯一の首長国であった。王妃アルワールの死後、アイユーブ朝は、ズライウ家以外のイエメンの諸国家や首長国までも滅ぼし、彼らの旗の元にイエメンをほぼ統一した。しかし同時代のザイド家に対しては、勢力を及ぼすに限りがあった。そしてラスール族がアイユーブ朝の後を引き継ぎ、「支援王」の呼称を持つ、ダーウド・ブン・ユースフ・ブン・ウマル・ブン・アリー・ラスールで終わる第一ラスール朝国家の時代に、ザイド家に対しての勢力は依然限られてはいるもののイエメンをほぼ統一した。

「戦闘王」アリー・ブン・ダーウードの時代以来、彼の家族や軍隊から彼に反対して起こった数々のクーデターに対して、彼が多忙であったという理由から、ザイド家の勢力が伸長した時代においての歴史的事象は、後に詳細に知ることになるだろう。

ラスール族の支配が終わった時、彼らの大臣達であったターヒル族がその後を継いだ。その後マムルーク朝が登場し、ターヒル族の首長国を根絶やしにしたが、それには2つの要因があった。まずターヒル族の競争相手であるザイド派やイエメン人たちの支持、そして当時イエメン人たちが、まだ持っていなかった火器の使用によってマムルーク朝が優勢であった事である。

トルコがイエメンにマムルーク朝の支配の直後に到来したが、それはエジプトやシリアにおけるマムルーク朝の支配が、滅ぼされた後のことであり、かつ彼らの王であったカンスーフ・ガウリーが、マルジュ・ターバカにおいて殺害された後であった。彼らはイエメンを支配することとなり、これがイエメンにおけるオスマーン朝の最初の支配として知られている。この最初のオスマーン朝の最初の支配は、西暦16世紀中葉（ヘジラ暦10世紀）に始まる。西暦17世紀（ヘジラ暦11世紀）に、イマーム・カーシム・ブン・ムハンマドはトルコに対する放棄の呼びかけの後、イエメンで彼の権力を拡大することが出来た。また彼の子供であり、アルムアイイド・アルカビール（大支援者）と呼ばれたイマーム・ムハンマド・ブン・カーシムがやって来ると、彼はイエメン人達の協力によって、イエメンからトルコを追い出すことが出来た。そして彼の兄弟であるアルムタワッキル・イスマーイルがある一定期間、イエメン全土にカーシム家首長国の権力を拡大することが出来た。そして最終的にはアルムアイイド・アルサギール（小支援者）と呼称されたムハンマド・ブン・アルムタワッキル・イスマーイル・ブン・カーシムの時代以降、南部地方がイマームの支配から独立することとなる。

トルコ人達がイエメンにやって来た。それは第2回目のイエメン統治であり、19世紀後半（ヘジラ暦13世紀）のことであった。そして彼らはイエメンのかなりの地域に彼らの影響力を及ぼした。その期間にはザイド朝が自分達の領土内での影響を保持し続け、英国がやって来て、アデンを1839年1月（ヘジラ暦1255年）に占領することになり、イエメン南部全域で様々な時期に保護と言う名目で勢力を拡張していった。

また第一次世界大戦後、ドイツとトルコを含んだ同盟国が敗北し、トルコがイエメンから撤退した直後に、前述の首長国はイエメンの北部全域に、その勢力を拡張することが出来た。その事から北部

全域は、イエメン「ムタワッキル」王国として知られるようになる。イエメン南部はイギリス人達の影響下で、各スルターン達が自分達の領土で限定された影響力を保持していた。この様にして、1962年（ヘジラ暦1382年）北イエメンにおける「栄光の9月26日革命」勃発までイエメン南部、北部において歴史的事象は継続していた。1963年（ヘジラ暦1383年）10月14日南イエメンのラドファーンから革命の火の手は始まった。そしてイギリスの植民統治と諸スルターンの統治から、南イエメンは独立に成功した。それは1967年（ヘジラ暦1387年）の10月のことであった。そしてイエメンは、イエメン・アラブ共和国として知られる北部とイエメン民主人民共和国として知られるイエメン南部となった。我々は、イエメンがその北部と南部が、自然、政治、本質的そして社会的な統一へ、アラブ・イスラーム的枠組みで、御威力を伴ったアッラーに依って、統一される日を待ち望むのである。